

知の創造としての授業をめざして：
授業改革へ向けての一提案

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 淑子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5470

II

知の創造としての授業をめざして

授業改革へ向けての一提案

松田 淑子

はじめに

時代の変化に伴い、戦後教育の枠組みを超えた教育改革、学校改革が望まれている。本論は、この学校改革の中核として、授業改革に焦点を当てたものである。

始めに、学校現場において授業改革を阻むもの、そして授業改革の必然性について述べたい。その上で、筆者自身の授業実践も含めた福井大学における取り組みについて紹介、検討し、授業改革の方策について一つの提案を行いたい。

I. 現代の学校の背景と授業改革の必然性

1) 授業づくりに価値をおけない現状

授業改革は、学校改革の中核であろう。なぜなら、児童生徒たちが学校で過ごす時間の大半は授業であり、教師と生徒の最も長い交流の時間も授業だからである。当然、授業力は教師にとって大変重要なのだが、実際 1980 年代以降の学校現場では、校内暴力や学級崩壊、モンスターペアレンツの出現など、教師が授業のために時間を割くことのできない状況が相次いでいる。そしてそのような状況が定常化し、いつの間にか教材研究や授業づくりにじっくり向き合うということも忘れられてしまったようである。

実際、中学校現場では、教師が重要としている 3 つの柱は「受験指導」「生徒指導」「部活動指導」¹とも言われている。そのような環境に新しく入った若い教師たちは、授業づくりということを取り違えて教師生活を送ってしまうかもしれない。学校の中に、じっくりと教材研究に励むモデルがいなければ、手っ取り早いマニュアル、誰でも明日の授業に使えるネタ、そのようなものを探すことが教材研究だと勘違いしても無理はないだろう。授業改革の第一歩は、授業づくりに価値をおくことからスタートしなければならないのである。

しかしながら、現実には教師の多忙化は進む一方である。近年では、学校現場にもリスクマネジメントや評価主義が浸透し、先回りした根拠の説明など、ペーパー上の仕事が肥大化している。よく言われるこ

とだが、実際に、子どもに向き合わずにパソコンに向き合う教師がどんどん増えてきた。

もう一方で、先にふれたように、教師の多忙さの背景に、児童生徒の変容があげられる。古くは 80 年代の「校内暴力」に始まり、90 年代から続く「いじめ」や「不登校」、それに加え近年では、子どもたちへの「しつけ」の必要性が、教師の多忙を招くとともに、学習以前の段階で足踏みせざるを得ない授業風景を引き起こしている。これまで当たり前家庭でなされてきたこともまた教師の役割となってしまったのである。そればかりか所謂モンスターペアレンツの出現に対処し、親の「しつけ」まで背負っている。しかし、これらのことは、単に個々の親の問題、家庭の問題としてとらえることはできない。これまでの日本社会において、放っておいてもうまく回って「当たり前」と思ってきた家庭は、実は多くの労力と犠牲を払いながら何とか機能していたのだと捉え直していった方がよいだろう。戦後の学校教育や企業社会がうまく回っていたのは、すべてを献身的に支えてきた家庭の存在があってこそなのである。そして、今後は容易くそれを期待できないことも確かであろう²。

現代の学校の現状を掘り下げれば、子どもたちや学校を取り巻く全ての環境が、学校がうまく機能していた頃とは既に大きく変容していることがわかる。この時代において、学校だけが昔のままであり続けることの方が不自然なのかもしれない。もちろん、昔が本当によかったのかも疑問である上、昔のままだころか、対処療法の連続で、大切にすべきことまで見失ってしまった学校は、他の諸環境と同様、早急に抜本的な改革が必要だと考えられる。

2) 規定されてきた授業と生徒たちの離脱

現代のように複雑化した社会では、人間によって作り出されたにも関わらず、逆に人間がそのシステムに規定されるという現象がしばしば起こりうる。

例えば、もともとテストとは、生徒たちの学力の定着を見るものであり、その結果を、生徒は自分の弱点を知り今後の勉強に活かすことができ、教師は自身の授業の反省材料とすることのできるシステムであったのかもしれない。しかし、現実には、生徒はテストで良い点を取るため、そして受験に合格するために勉強し、教師は生徒のニーズである「受験指導」の根拠としてテストの結果を使うことが主となっている。つまりテストは、フーコーが『監獄の誕生』³で例示しているように、教師にとっては生徒たちに無条件に勉強させることのできる、生徒にとってはテストが近づくと誰に言われなくとも勉強しなければいけないと自己管理のできる、手っ取り早いシステムとして存在してきたのである。

そして、本論では寧ろこのことが重要なのだが、このようなテストというシステムは、教師の行う授業内容をも規定し始めるのである。つまり、テストによって短時間で客観的に測れるような内容ばかりがどんどん授業を占めるようになり、その正解を教え込むことが授業の中心になってしまうのである。正解は沢山あっては困るし、速く導かれなければならない。そのような正解に導くための授業内容や授業方法が良い授業と規定される。そうして教師は最も合理的な解き方や細切れの知識を一斉に教え込み、生徒はそれに自分の意見や疑問などは挟みこむことなくただひたすら覚える、それが当たり前の、典型的な授業風景となっている。

では、そのような授業を、現代の生徒たちはどのようにとらえているのだろうか。

宮台真司は、社会に「底を与える」ことを目的としたのが「近代思想」であり、「底が抜けて」いることを明らかにするのが「現代思想」だと説明している⁴。日本において「現代思想」が流布され受け入れられたのが 1980 年代である。つまり多くの教師たちが生徒だった頃は、まだ社会に「底が与えられ」ていた時代であり、生徒たちは、社会の「底が抜けて」いることが誰の目にも明らかになってしまっている時代を生きているのである。両者の足元は決定的に異なっている。具体的に言えば、自分自身につながらない細切れの知識を詰め込んだ量で学校が決まり、その学校の序列がそのまま会社の序列と生涯賃金と幸福度につながる、そう信じることでできた時代、皆で社会に「底を与えた」時代に子ども時代を送った多くの教

師たちにとって、勉強に向かうことは疑う余地のない、疑っても仕方のないことだった。疑ったり悩んだりする暇があったら勉強した方が得、と誰もが思っていた。しかし、教師たちがどんなに躍起になっても、「底が抜けて」いる社会、つまり学校の勉強をしたからと言ってそんな人生のレールは保障されていないことが誰の目にも明らかになった時代に、自分自身と離れた勉強に生徒全員を向かわせることはまずできないであろう。学級崩壊を起こす子どもたち、一見平穏でおとなしく見えながらも仮想空間を居場所に行っている生徒たちは、ある意味実に正直な反応をしているようにもとれる。

では、このような状況で、一体どのような授業が生徒たちにとって意味あるものとなり得るのであるのか。どのような授業改革の方向性が考えられるのだろうか。福井大学の取り組みや筆者自身の大学院の授業を例にそれらを考察していきたい。

Ⅱ. 授業改革の方向性

1) 福井大学の取り組みから

教師の専門的力量を高めるため、福井大学においては、寺岡、森、松木、柳沢各氏らが中心となり、約20年前から、様々な方面で学校改革の試みを実践してきた⁵。その取り組みの一角として、大学や大学院における教育課程の構築があげられる。

教職科目に付随しカリキュラム化された「探求ネットワーク」(1995年度開始)は、子どもたちの長年にわたる協働探求活動を支える実践活動であり、「ライフパートナー」とともに、教師としての実践的な力量を育てることを中核に据えた福井大学教育地域科学部のシンボルと言える。「探求ネットワーク」での活動を通して将来の進路を決定し、めざすべき教師像のイメージを確立させた学生は少なくない。

現在学校教育課程4年の姫野千秋は、4年間「探求ネットワーク」を継続してきた学生の一人である。姫野は、中学時代に行った「総合的な学習の時間」によって初めて学ぶ意味を見出し、教員になることを考え始めた。そして、大学進学にあたり、「探求ネットワーク」に惹かれ福井大学を受験し入学したのである。卒業論文⁶では「探求ネットワーク」での活動や自らが受けた「総合的な学習の時間」を省察しながら、新しい学びを支える授業実践者のあり方について提案し、自らもその一人となることを宣言している。姫野は、「総合的な学習の時間や探求ネットワークでの学びを体験してしまうと、他の授業には益々魅力を感じなくなった。学ぶ意義が分からず、意欲がわかなかった。」と述べている。

ただし、姫野のような原体験を持つ学生にとっては、「探求ネットワーク」は実践的な授業として多大な学びを得ることができるが、一方でその価値を見いだせない学生も少なからずいるという。原体験を持たない学生にとって、いきなりコーディネーターのポジションにつくことは、上級生というモデルがいたとしても、なかなか難しいのかもしれない。

2) 筆者の取り組みから

① 生徒としての原体験と高校教員としてのスタート

筆者は3年前(教職大学院開設の1年前)に、家庭科教育学の実務家教員として福井大学に採用された。ただし、3年間の教職大学院専任教員ローテーションに組み込まれており、教職大学院を足場としながら、学部教育には兼任教員という立場でかかわることとなった。それ以前は高校教育現場において、教科教育(家庭科)と「総合的な学習の時間」を担当しており、教育改革に対しても強い関心を持ち、現場からの発信も続けていた⁷。

筆者が小・中・高等学校通して記憶に残っている授業風景は、例えば、黒板に描かれた図形の面積をどのようにもとめたらよいかという問いに、色々な補助線のアイディアをクラス中で出し合った算数の時間。縄文時代の絵画を見て、どんな時代だったのかと皆で想像し合った社会の時間。俳句や短歌からイメージする風景を描いた国語の時間。授業ではなくレポート課題ではあったが、「あなたが妊娠した時、胎児に障

害がある可能性が50%だとわかったら、あなたは産みますか？」と問われ、一晩考え続けて書いた保健体育のレポート。などである。詰め込み教育全盛期と言われた時代であったにもかかわらず、このような考える授業に恵まれたことを感謝したいと思う。そして、このような授業風景が原体験となり、筆者の授業のイメージは創られていたのだと思う。

また、筆者は教員としてのスタート時点からずっと、自由な校風の附属学校に勤務してきた。個性豊かなベテラン教師たちは誰一人教科書を使った授業はしておらず、それぞれの授業スタイルをもっていた。一方、目の肥えた生徒たちはよく「先生はこの授業を通して何を考えさせたいのか」と厳しく若手教師たちに迫ってきた。若手教師たちはいつかは自分もベテラン教師たちのように、生徒たちに信頼される教師になりたいと、猛烈に教材研究に励み、オリジナルの授業を創ろうと真剣であった。このような中、筆者は、「家庭科とは何か？」という問いを自分の中に持ち、更新し続ける一方、教え込みではない、生徒と共に考え、語り合い、新たな知を創り出す授業を自分自身のスタイルとしていった。

筆者の場合、自分自身が受けた授業である原体験と、教師として過ごした学校の環境が、自ずと、生徒と共に考え創り出す授業を行う背景になったと思われる。そして、現在も創造性と協働性を持ち合わせた授業が、生徒たちの学びを支えるのだと思っている。

では、このような授業の価値を、教員を志す学生たちに伝え、授業改革を進めるためには、どのようなアプローチをすればよいのであろうか。大学院で実践した授業事例をもとに考察したい。

② 大学院の授業での気づき

ここでは、一つの事例として、少人数で行っている教科教育専攻の大学院の授業について紹介したい。

この授業は例年、それぞれの院生のニーズに合わせてながら、教員である筆者自身の関心事も含め、毎年自由に授業をデザインしている。

今年度は、始めにそれぞれの院生に、自分の卒業論文の内容と修士論文の構想を紹介してもらった。次に、教員である筆者も、今の関心事である「現代社会」を大観することについて紹介した。ただし、説明するのではなく、皆で出し合い吟味することによって、また新たに積み直したいと考え、「昭和から平成へ」と題してKJ法方式で各自マップ作りをして紹介してもらった。そのマップの中でどこかのカテゴリーに焦点を当て、その現状と背景、そして未来デザインと自分自身が担うことについて、調査、思考し報告し合うこととした。選定されたテーマは、雇用形態、技術革新、男女の関係性、幸福論、学校教育の変遷と未来などであった。報告後に話し合う過程で、それらをすべてをポストモダンという時代の中に位置づけて考えることができた。最後に、ここまでの議論がエッセンスとして内在している2本の映画を視聴し話し合った。1本目はタイにおける幼児買春と臓器売買を扱った「闇の子供たち」⁸であった。話し合いは、消費の南北問題や、9.11以降の世界における二項対立図式の崩壊などにつながっていった。

最終課題である2本目の映画『明日、君がいない』⁹の視聴と話し合いの授業風景を以下に示す。

『明日、君がいない』のあらすじ

映画の舞台はオーストラリア南部の高校。生徒の誰かが校内で自殺したことを示すシーンが冒頭に流れる。その後、自殺を図ったのは誰かわからないまま、6人の生徒にスポットを当て、事件前の学校風景が展開される。

6人の生徒とは、弁護士の父を尊敬し、自らも弁護士を志望している成績優秀なマーカスと、両親が兄と自分を差別することに不満を抱くメロディ。スポーツマンで人気者のルーク。ルークの恋人でルークとの結婚を願うサラ。ゲイであることをカミングアウトし差別を受けるショーン。生まれつきの障害で、足を引きずり、無意識に放尿してしまうスティーンである。

しかし、明らかになった自殺者とは、6人の誰でもない、ケディという子ども好きの心やさしい少女であった。

学校の中で、一見して弱者のショーンとスティーブンはもちろん、傍からはあこがれの存在、所謂勝ち組ともいえるマーカスやルークにも意外な真実があり、スポットの当たっている6人皆それぞれに自分自身の虚構と現実の板挟みに苦しんでいた。それらは、誰に向けて語っているのかわからないシチュエーションで一人ひとりが語るシーンと、当日の学校風景によって明かされていった。

映画の中で描かれる教師たちは一貫して無味な存在であり、全体のトーンから学校というものに何の共同性も期待できないことが見て取れた。ただし、この映画はそのことを主題にしているわけではないことも伝わってくる。換言すれば、学校や教師に何の期待もしていないことはあまりにも自明であり、そのようなことを今さら主題とすることはない、ということである。ちなみにこの映画は、監督のムラーリ・K・タルリが、実体験をもとに若干19歳で脚本化し、22歳で完成させたものである。

ラストシーンの間際まで、脇役の一人と思われていたケディは、マーカスにほのかな思いを寄せている風の心やさしい女子生徒であった。そして、自殺したのはそのケディであった。ケディの死が明らかにされた後、他の6人のようにケディ自身の語りの場面が映し出された。隠れた苦悩が語られるわけでもなく、屈託のない様子で、子ども好きの自身について語っていただけであった。ケディの死の意味がわからぬまま他の6人が一言ずつケディの死について言葉を述べ、映画は終了した。

視聴後、「死んだのはケディ？」という腑に落ちない思いが皆の頭をよぎった。ロ々に「なぜケディ？」「そもそもケディって誰？ノーマークだったよね。」と言うしかなかった。敢えて視聴直後はそれ以上話さず、次週までそれぞれに温めておくこととなった。

翌週、柱となる問いは自ずと「ケディはなぜ死んだのか？」となった。そして、問いに対してのそれぞれの解釈を語り合った。

院生のIさんは「ケディはいつも皆のことを気遣っていた。皆に気を遣い続け生きることの辛さがケディを死に追いやったのではないか。」と語った。

筆者もまた、院生とともに自分なりの解釈を語った。「一人ひとりが語るシーンが気になった。あの語りは他人ではなく自分自身への語りのような気がした。そこでケディは、例えば子どもを本心では嫌いなのだが、子ども好きのやさしい女の子という自分を自分自身の前でも演じていたのではないか。自分の醜い心を受け入れることができず、自分自身を偽っていたのではないだろうか。自分で自分を偽っていることに疲れ、死を選んだのかもしれない。」

院生のSさんはこれまで、率先して自分の意見を言うことは少なかった。「よく皆そんなに考えるね。疲れそう。自分は何も考えていないので楽に生きている。」初めの頃の授業で、そう言ったのが印象的だった。ただ、授業の中で、実はSさんは、そう言って自分をカモフラージュしているのではないかと何となく感じることもあった。そのSさんは、普段なら他の人の意見に同意を示すのだが、今回は決して頷こうとしなかった。そして、自分自身の解釈を語り始めた。「ケディには、何かを欲するとか、こだわるとか、自己主張をするとかいうことはほとんどないのだろう。でも、どうしても譲れないものが一つか二つあるのではないか。その一つが思いを寄せているマーカスだったのかもしれない。だから自分の言ったことでマーカスが乱れ、拒絶されてしまったことで、自分の中のすべてが否定されてしまったように感じ、絶望し自殺に至ったのではないか。いくつも柱のある建物にとって1本柱が折れても大したことではないかもしれない。でも、2～3本しかない柱だったとしたら、1本が揺らげば崩れてしまう。ケディは少ししか柱を持っていなかったんだと思う。だから、ケディにとってマーカスは、他人が思うより遙かに貴重な1本の支えだったのだろう。」

筆者やIさんにとって、Sさんの解釈は、正直思いもよらぬものであった。マーカスに対するケディの思いも映画ではさほど描かれてもおらず、また、ケディが言ったこともケディの親切心からであり、マー

カスの乱れは本人の問題であってケディのせいではないことであった。ショックではあったかもしれないが、自殺を図るほどのことにはとても思えなかったからだ。しかし、Sさんの言う通り、彼女にとって貴重な1本の支えだったとしたら、確かにそうなのかもしれない。

それぞれの解釈は、各人が一週間考えてかなり確信をもったものであった。他の意見を聞いて、納得するとともに、それでも自分の意見も間違っていたようには思えなかった。しかしまた、これを、「いろんな解釈があるね。」とオープンエンドで終わらせるのも何か違うように思えた。さらに色々な角度から皆で語り合ううち、ある一瞬、おそらく皆同時に同じことが頭をよぎった。

「ケディは自分自身……。」

Iさんは、院生になってから自分の思いをそのまま他人に語ることができるようになったが、学部生までは皆のことを気遣って何も言えずしんどかったと、以前に打ち明けたことがあった。筆者は、自分の気持ちに正直になれないことが最も辛く感じるタイプである。だから、自分を自分で偽ることが最も耐え難いと思っており自殺するほどの理由はそれに違いないと思ったのである。そして、Sさんは、ケディが自分と似ているタイプだと思ったという。アイデンティティというものがあまりがなく、他人に左右されやすそうところが似ていると感じたそうだ。しかし、他人から見ればさほど主張しているように見えなくても、唯一の自己主張であったマークスへの思いが否定されたことはケディにとって大打撃だったのだろうと想像したという。皆、一様にケディに自己を投影させていたのだ。ただ、確かにSさんはケディに最も近いタイプであり、この映画は実話に基づいたストーリーであるから、現実にはSさんの解釈通りなのかもしれない。

しかし、ケディに自己を投影させ、各自がストーリーをそれぞれに深めて解釈し、それを介して自分自身を語り合えたこと、そして様々な解釈があるという次元を超えて自己投影というキーワードを皆で導き出し共有できたことに大きな価値があったように思う。自己を通して知を創造するという営みを、皆で行ってきたのである。

Iさんは、「この授業は自分にとって本当に大きなものであった。そして、学校には色々な先生がいることが一番いいことだと思った。」と述べた。詳しくは後述するが、筆者自身にとっても大きな気づきのある授業であった。

皆一様に、このような授業を共有できたことを感謝し合い、締めくくりの授業が終了した。

さて、IさんもSさんも偏差値の高い高校の出身者である。その二人が学校教育の変遷と未来について扱った授業の中で、このようなことを口にした。「学校の授業って、先生の意図が読めたよね。」「つまらなかったよね。」さらにIさんは、「最近、学校って本当にいらんんじゃないかと思う。大事な10代、学校に行かないで別のことに時間を使った方が自分の人生にとって有意義だったように思うから。大検とかで大学にも入れるし、学校で得たものってあまりないような気がする。逆に、失ったものの方が大きいかも。実際に学校に行かなかった友達がいて、その人の方が豊かな10代を送ってきたように思えるし、人間的にも大きいと思えるから。学校って意味あるのかな?」と語った。

Iさんの疑問を、若さゆえの甘さ、勝ち組の奢り、と言って聞き流すことはできない。長年高校の教員だった自分にとってはとても辛い言葉であったと同時に、そう本気で思っていた生徒は多かっただろうなと想像できた。

「底の抜けた」社会だからこそ、学ぶ意味が問われるのだとしたら、それはある意味学校にとって、教師にとって、とても素敵なシチュエーションなのかもしれない。無条件に受け入れる生徒ばかりでは、教師もまた無条件に教え込むことが当たり前になるからだ。筆者が「家庭科とは何か。」という問いを持ち続け、授業を模索し続けることができたのは、受験教科ではない教科を担当していたことも要因である。受

験のため、というモチベーションのない生徒たちを授業に向かせるには、生徒たちが学びの価値を実感できることが必要だったからだ。学びの価値の実感・・・この院生たちとの授業で、どのような価値に気づくことができたのだろうか。

授業では、「ケディはなぜ死んだのか？」という問いの下、ケディという少女について考えていた。しかし、各自の導き出した答えは、ケディに自己を投影したものであった。実はケディを通して、「自分とは何者か？」という問いに答えようとしていたのかもしれない。さらに、本当に重要なのは、その答えにあるのではなく、「自分とは何者か？」という問いを自分の中にもつこと、そして他者との語り合いを通して、そのような根源的な問いを一層深めていくことなのではないだろうか。Iさんの疑問に答えることはできないが、もしもそのような問いを持ち、深めていくことが、学校を中心におかれるのだとしたら、そしてもしIさんが子どもに戻り、学校に行くか否かを選択することができたとしたら、Iさんはどうするだろうか。未来の子どもたちはどうするのだろうか。

ただし、このような学びの実感は簡単に創出できるものではない。この授業においても、15回の授業の流れの中で、教員と院生との関係性の中で、ある意味偶然起こったものであり、こうすればできる、といったノウハウなど存在しない。ましてや、『自分とは何者か？』という問いを持ちなさい。その答えを語り合い、深めなさい。」という指示によって生まれるものではないのである。

前述したように、この授業は筆者にとっても大きな気づきのある授業であった。その気づきとは、このことである。筆者は、高校から大学に移り、受験にないことをさせられると迷惑がっている生徒たちではなく、教師になりたいというモチベーション備えた学生を対象に授業をすることになった。ある意味受験教科の教員と似たポジションになったのである。正直なところ、居心地はとてもよかった。さまざまな授業で、これまでの自分の授業実践を紹介することを通して、考える授業、ともに探究する授業の価値を語った。学生たちはスポンジのように吸収してくれた。高校での、常にマイナス地点からのスタートではなくなり、スタート地点にまでもっていくための膨大なエネルギーは不要となった。代わりに、あれもこれも、筆者の中に蓄積された様々な知識を与えることにエネルギーを注ぎ、無意識のうちに筆者もまた、教え込む教師になってしまっていたのである。しかし、そのような授業に対する物足りなさを常に感じていたのも事実であった。

そして、この最後の授業を終え、学び合う授業の感覚、知を創り出す感覚を思い出すことができた。他の授業では、「知識を詰め込む授業じゃなくて、学び合える授業をしなさい。」と教え込もうとしていた自分を自覚することができたのである。

おわりに ～授業改革への一提案～

本論では、授業改革を推し進めるにあたって、まず、学校や社会の現状を考察することを通して、改革を阻む問題点や改革を進める必然性を提示した。その上で、福井大学での取り組みを事例として、授業改革の方向性を模索した。その方向性の一つとして、生徒たち自身が意味の見出せる根源的な問いをもち、互いに深め、知の創造をめざした授業を提案した。しかしながら、そのような授業の価値を見出すためには、教師自身の生徒としての原体験の有無が大きく影響していることが推察された。

小・中・高等学校において、このような授業の原体験を持てなかった学生たちにとっては、大学の授業は原体験となり得る最後のチャンスなのである。このことを教員養成系大学学部の教員が、自覚的に、そして実践的に授業を創っていくことが、授業改革の重要な土台づくりであり、教員養成系大学学部教員にとって最も根幹となる教師教育改革の営みとなるのではないだろうか。学校現場の授業改革の背景には、それと相似形で教員養成系大学、学部の授業改革が求められているのである。

本論の執筆にあたり、親身にご相談にのって頂き、新鮮なご意見を頂戴した寺島弘子先生、ともに授業と新しい知を創り出してくださった院生の方々や卒論生の姫野千秋さんをはじめ、お世話になった皆様に、この場を借りて深く感謝の意を表します。

注

¹ 松木健一『建築が教育を変える 福井市至民中の学校づくり物語』中学校を支配する「3つの指導」第1章 学校建築は学校を変えられるか 2009 鹿島出版会

² これらのことは、すでに落合恵美子らをはじめ、家族社会学者によって明確にされてきている。参考文献として、落合恵美子『21世紀家族へ』有斐閣選書 1994年などがある。

³ ミシェル・フーコー『監獄の誕生』新潮社 原著 1975年

⁴ 宮台真司・速水由紀子『サイファ覚醒せよ!』筑摩書房 2000年

⁵ 主として寺岡英男・森透・松木健一・柳沢昌一らによる 1996年度から 2006年度の論文集『学習過程研究クロノロジー I・II』エクシート を参照

⁶ 姫野千秋『新しい学びを支える授業実践者のあり方～総合的な学習の時間をもとに～』2009年度 福井大学教育地域科学部 卒業論文 2010.2 受理

⁷ 分校淑子(松田淑子)『現場からの教育改革をめざした『総合的な学習の時間』の意義と課題—「理想の教育を提案しよう!」の授業実践を通して—』、『高校教育研究』第55号、85-99頁、金沢大学教育学部附属高等学校、(2004) など

⁸ 映画『闇の子供たち』(日本、2008年、監督 阪本順治)

⁹ 映画『明日、君がいない』(オーストラリア、2006年、監督 ムラーリ・K・タルリ)